

## 1 ベと病

### A 生態と防除のねらい

- 1 葉に発生する。葉脈に区切られた多角形の病斑を生じ、多湿時には病斑の裏にすす状のかびを生じる。
- 2 降雨が多く多湿条件下になると多発しやすくなるので、気象条件の悪化時には時期を失ないように薬剤を散布する。施設栽培では換気を良くし、過湿防止に努める。
- 3 肥料切れや草勢の衰えた状態のとき多発する傾向があるので、適正な肥培管理を行う。
- 4 多発後の防除は困難なので、薬剤散布は予防及び発生初期に重点をおく。

### B 耕種的防除法等

- 1 排水と換気を良くし、過湿を防止する。
- 2 プラスチックフィルム等でマルチを行い、地表からの水滴のはね返りを防止するとともに、施設内の湿度を低くする。
- 3 肥料切れしないように管理する。
- 4 老化葉や発病葉は除去し、通風採光を良くする。

### C 薬剤防除のポイント・注意事項等

薬剤耐性菌発生のおそれがあるので、同一系統剤の連用を避け、ローテーション散布を行う。

## 2 疫病

### A 生態と防除のねらい

- 1 本病は短期間に急激にまん延するので、発生してからの防除は手遅れになりやすい。そのため、防除は予防的な手段に重点をおく。
- 2 かんがい水により下流域にまん延するので、排水対策を十分に行い、浸水や滞水防止に努める。
- 3 本病はカボチャ台木の利用によって回避できる。しかし、灰色疫病はカボチャ台木も侵すので、病原菌の確認が必要である。

### B 耕種的防除法等

- 1 床土は無病土を使用する。
- 2 カボチャ台に接ぎ木する。
- 3 かん水には地下水を用い、病原菌の汚染の心配のある河川水やため水を使わない。
- 4 発病株は抜き取って処分し、ほ場の周辺に放置しない。

### 3 炭疽病

#### A 生態と防除のねらい

- 1 主に露地栽培で発生する。病原菌は雨水の飛沫とともにまん延する。発生してからの防除は手遅れとなるので、気象予報に注意し、時期を失しないように薬剤防除を行う。
- 2 窒素質肥料の多用は発生を助長するので、適正な肥培管理を行う。
- 3 被害植物の組織中の菌糸や支柱等の資材に付着した胞子が翌年の伝染源となるので、発生ほ場では収穫後に被害残さを処分する。

#### B 耕種的防除法等

- 1 発生地での連作を避ける。
- 2 排水を良くし、窒素質肥料の多用を避ける。
- 3 敷きわらやプラスチックフィルムでマルチを行い、地表面からの病原菌のはね返りを防止する。
- 4 被害果、被害葉、支柱の巻きひげ等は取り除き処分する。

### 4 うどんこ病

#### A 生態と防除のねらい

- 1 一般に生育後期に発生が多いが、過繁茂で通風採光の悪い場合に発生しやすいので、密植を避け、整枝、摘芯等の作業は早めに行う。
- 2 施設栽培では、空気が停滞気味の条件で多発するので、努めて換気を図る。
- 3 多肥状態で多発する傾向があるため、施肥は適正に行う。
- 4 一般に発生が早いほど被害も多くなる。葉裏から発生し始めるので、葉裏をよく観察し、初発を見たら速やかに薬剤散布を行う。

#### B 耕種的防除法等

- 1 密植を避け、通風採光を良くする。
- 2 窒素質肥料の多用や偏った使用を避ける。
- 3 老化葉や発病葉は除去する。

#### C 薬剤防除のポイント・注意事項等

DMI 殺菌剤（FRACコード：3）は、連用すると薬剤感受性が低下しやすいため、他系統薬剤とのローテーション使用を行う。

## 5 斑点病

### A 生態と防除のねらい

- 1 主として葉に発生する。初め淡黄色の小病斑を生じ、次第に拡大して褐色に変わり円形か多角形の病斑になる。
- 2 露地栽培に発生が多く、特に多雨時に発生する。

### B 耕種的防除法等

- 1 施設栽培では多湿にならないよう換気に努める。
- 2 適正な肥培管理を行う。

## 6 つる枯病

### A 生態と防除のねらい

- 1 病原菌は、被害植物中や資材等に付いて越冬し、伝染源となるので、被害残さの処理や資材に付いた巻きひげ等を取り除く。種子伝染による発生も多い。
- 2 梅雨期や秋季に雨が多いと多発する傾向がある。地際が多湿になると茎の地際部での発生が多くなる。
- 3 草勢の衰えたときに病勢が進展するので、収穫が多くなった時期の肥培管理には注意する。

### B 耕種的防除法等

- 1 種子伝染するので、健全種子を用いる。
- 2 施設栽培では換気を良くし、できるだけ過湿を避ける。
- 3 肥培管理に注意し、樹勢の維持を図る。樹勢に合わせて摘果し、着果負担を軽減させる。
- 4 被害果や被害葉は速やかに除去する。
- 5 収穫後、発病株や資材についた巻きひげ等も除去する。

## 7 つる割病

### A 生態と防除のねらい

- 1 本病原菌は土壌伝染及び種子伝染する。土壌中では長期間生存するので、既発生ほ場では土壌消毒を行い、カボチャ台木に接ぎ木する。
- 2 窒素質肥料を多用すると被害が増大する。
- 3 植え傷みや線虫の加害、乾湿の差が激しいかん水法等による根傷みは感染を助長するので注意する。



### B 耕種的防除法等

- 1 夏期に太陽熱土壌消毒を行い、ほ場内の菌密度を下げる。
- 2 カボチャ台木に接ぎ木する。
- 3 ほ場の排水を良くし、湿害による根傷みを起こさないようにする。
- 4 施肥量の過多、特に窒素質肥料の多用を避ける。
- 5 被害株は早急に除去する。収穫後は、残さを処分する。

## 8 ウイルス病

### A 生態と防除のねらい

モザイク病は、ズッキーニ黄斑モザイクウイルス (ZYMV)、キュウリモザイクウイルス (CMV)、カボチャモザイクウイルス (WMV-2) 等によって引き起こされる。これらは、アブラムシにより伝搬されるため、アブラムシの防除が重要である。また、感染株から汁液の接触によって感染が広がる可能性もあるので、発病株は速やかに処分する。これらのウイルスは土壌や種子伝染しない。

### B 耕種的防除法等

- 1 アブラムシ類の飛来防止のため、防虫ネット被覆下で育苗し、本ほでは、プラスチックシルバーフィルム等によるマルチまたはシルバーテープを利用する。施設の開口部は防虫ネットを張る。
- 2 育苗期や栽培初期の発病株は速やかに除去し、植え替える。
- 3 発病株に触れた手や器具で芽かきや整枝等をしない。触れた手は石けんでよく洗い、器具は次亜塩素酸カルシウム溶液または第三リン酸ナトリウム10%溶液に浸してから使用する。

### C 薬剤防除のポイント・注意事項等

媒介虫の防除 (ウリ類虫害の項参照)

WMV-2、CMV、ZYMVに対しては媒介虫 (アブラムシ類) の防除を行う。